

◆離任式あいさつ原稿

6年間、S高校でお世話になりました。このような機会を頂けることに感謝します。

今から30年ほど前の6月のことをお話します。私は母校で教育実習を受けていました。清掃が済んだ、少し蒸し暑い放課後、西日の差し込む教室に20人ほどの実習生が集まりました。定刻よりも少し早く、いかにも精悍な、覇気に満ち満ちた様子の教頭先生が入ってきました。鋭い眼差しとキラリと光る眼鏡に私は威圧感すら感じました。

さっそく講話に入りました。教頭先生は母校の現状と問題点、それを受けての将来構想、教師のあるべき姿などについてわかりやすく熱心にお話をしてくれました。そして最後にひとこと、こう教えてくれました。「いつも書くものを持っていなさい」(繰り返し)。

この一言がとても深く印象に残りました。

教員採用試験に通って、無事に就職しました。ある日、会議に向かおうとしているときにボールペンを持っていないことに気がつきました。そこで私は当時の教頭先生のあの話を思い出して「ああ、オレは今、冷静さに欠けているな。気をつけなければ」と反省しました。

書くものをただ持っているだけでは駄目だということもわかりました。紙がなければ書けないのです。また、書くものを持っていても、すぐに使える状態でなければ、持っているとは言えないということもわかりました。

さらに、仕事のある場面で起きたことですが、先輩教師から「柳沢さん、こういうときには、書かないで、まず相手の話をよく聴く姿勢が大事なんだよ」と教えられたこともありました。書くものがあるからといって、それをいつも使えばいいかということ、そういうものではないのです。「持っている」と「使う」ことは別のことだったのです。

「いつも…持っている」というのは本当に「いつも」です。良い考えというものは、いつ降ってくるか、わかりません。ですから、枕元にも紙と鉛筆を用意してあります。クルマの中にもボールペンを用意してあります。トイレにもあります。最近では水に濡れても書けるペンや紙が売られているようですので、する・しないは別として、お風呂で書くことも可能になってきているようです。これから調べてみようと思っていますところですよ。

このように、あの一言はとても単純ですが、いつも正しく実行することは簡単ではありませんでした。このことが、どのようにS高校と関係するのか。…私の場合、長い年月をかけて当時の教頭先生の教えを実行するように心がけてきましたが、それがやっと、ここ、S高校でこうして、みなさんの前でお話できる段階に達したということです。共に学んでくれた、みなさんやみなさんの先輩の生徒たちに深く感謝しています。

きょう、このお話をするにあたり、当時の教頭先生の了解を得るため、連絡を取ってみました。そして、「あの時、どのような思いで、あの話をしてくださったのですか」と、うかがってみました。すると、電話の向こうの教頭先生は少しお年をめされた声ではありましたが、確かな口調でこう教えてくれました。「…じつは、私の父も教員を務めていて、つね日頃から、心構えとして、あのことを私に話してくれていたのです…」と。こうして、いま皆さんにお話ししたことが、人間の長い長い営みの一部になればいいなと感じています。

みなさんにも、書くことで未来を切り開いてほしいと願っています。ぜひ、やってみてください。またどこかで会いましょう。6年間、ありがとうございました。

(2018年3月23日・金曜日・柳沢克央)

やなぎさわかつひろ